



学校だより

山辺里小学校

学校HP <http://saber-e.murakami.ed.jp>

令和3年9月15日 第5号

鉛筆とタブレット

校長 小川 誠

鉛筆は、明治初期には「木筆」などと呼ばれていたそうです。日本で最初に鉛筆を使ったのは、徳川家康だといわれています。家康の遺品の一つに硯箱があり、その中に鉛筆が入っていたのだそうです。当時の鉛筆のつくりは現在とほぼ同じで、芯は黒煙と粘土を混ぜて焼いたものに、軸は木材を貼り合わせたものでした。

明治に入ってから、鉛筆が使われるようになりましたが、当時は需要も少なかった上、ほとんど外国からの輸入品でした。

明治20年(1887)、現在の三菱鉛筆の創業者 真崎伝六によって日本で本格的な鉛筆製造が始まりました。しかし、日本では長く毛筆で書く習慣があり、鉛筆はなかなか普及しませんでした。

その後、明治34年(1901)に、逓信省(後の郵政省、現在の日本郵政)が真崎鉛筆を採用したことで、全国に鉛筆が普及していきました。やがて、学校でも毛筆から鉛筆への切り替えが順次行われ、役所や会社、家庭などへも広がりました。

鉛筆は、長い時間をかけながら、現在のように日常的に使われるようになったのです。

令和3年度は、「GIGAスクール元年」と言われています。一人一台のタブレット端末が配備され、各校で積極的に授業や家庭学習での活用が進められています。

山辺里小学校でも、遠隔地とのオンライン交流、調べ学習、考えの交流、図工の作品作り、音読の録画、授業での振り返りの入力等、学年の発達段階や学習内容に合わせて活用をしています。

鉛筆とは違い、あっという間に広がったタブレットですが、子どもたちの慣れる速さには広がり以上に驚くばかりです。私たちも子どもたちに負けないよう、研修を積みながら有効な活用方法を探っていきたく思います。

鉛筆とタブレット、できることには大きな違いがあります。しかし、「自分の考えをまとめる」「表現する」「交流する」「比べる」など、思考の道具としての重要性という点では、鉛筆もタブレットも変わらないのではないかと思います。

子どもたちは、娯楽ツールとしての側面にばかり注目しがちですが、授業での活用を通して、思考ツールとしての有効性や大切さを、子どもたちに実感させていきたいと考えています。

ご家庭でも、学習ツールとしてのタブレット端末の活用にご協力をお願いいたします。

さて、2学期がスタートしました。2学期は、運動会、文化祭、青空祭りと大きな行事があります。加えて5年生には自然教室、6年生には修学旅行もあります。

これらの行事は、自分自身の体力や気力、心を鍛える大切な機会です。また、学校、学年、学級全体を、団結力のある集団として高める絶好の機会でもあります。行事を通じて、子どもたちが、協力、チームワーク、助け合い、思いやりの気持ちを大きく育ててほしいと願っています。

今学期も「一人一人の笑顔があふれる学校」を目指し、取組を進めていきます。2学期も、ぜひご協力をお願いいたします。

